

木田市長の



vol.81

南三陸町と鳥羽市の絆

去る8月4日、南三陸町の佐藤仁町長をお招きして防災シンポジウムを開きました。当日は500名を超えるかたがたに参加していただき誠にありがとうございました。

佐藤町長は昨年3月11日の大津波発生の折、南三陸町の防災対策庁舎の屋上で九死に一生を得たことで有名となりました。

震災後1か月も経たない4月4日に、私は佐藤町長と、鳥羽市としても何とか被災地の役に立ちたいということから、「困っている人たちを鳥羽市で受け入れますよ」というメッセージを持って三陸地方を訪れていた時のことでした。ベイサイドアリーナとい

う、高台にある大きな体育館の狭い一室で、町長は公務を果たしておられました。その部屋の奥には折りたたみ式のベッドが置かれており、一目でここが町長室兼寝室であるということが分かりました。

残念ながら被災されたかたがたを鳥羽市で受け入れるということはかたがたありませんでしたが、そのときの縁もあって、6名の市職員を佐藤町長の秘書として南三陸町へ送ることとなりました。大変な目に合われている南三陸町のお役に立てたということとともに、派遣された職員達にとっても一生の宝となり得る経験を積むことができたのではないかと思います。

佐藤町長は講演の中でさま

ざまなことについて話されましたが、その夜にもたれた市の防災関係者や派遣職員との夕食会では講演内容とは一味違う当時の思い出話に花が咲きました。わたしも同席していて、町長と派遣職員の間には、わずかな期間ではありましたが、本当の信頼関係ができたのだなああと感動しました。佐藤町長の話を伺っていて強く印象に残ったのは、人間は非常な悲しみに遭うと、そのやり場の無さから他人に対してとても厳しい言葉を浴びせてしまうということでした。九死に一生を得た町長自身も被災されたかたから厳しい言葉を突きつけられ、とても苦しく辛い体験をされたようです。

「津波でんでんこ」という言葉のように、町長であろうと自分の命を助けるために、できる限りの努力をすることは許されるはずですが、この一例が示すような苦しい日々が今も佐藤町長のまわりでは続いています。今後の町長のご健勝とご活躍をお祈りするとともに、わたしたちの地域にあのような不幸が訪れないことを心より望んでいます。



「自らを解き放つために」

7月30・31日の両日、部落解放第44回全国高校生集会(全高)が市民文化会館および市内の宿泊施設で開催されました。

三重県では、平成9年に一度開催され、その後はさまざまな人権問題に取り組み高校生との反差別三重県高校生友会が結成され、県内各地において活動が継続されています。

この集会は、被差別の立場にある全国の高校生が集い、学習と交流を通して、自らの経験や思いを仲間へ伝え、そして仲間の経験や思いを学び、高校生一人ひとりが、差別に對する恐れや不安から自らを解放し、部落差別の問題をはじめ、さまざまな人権問題へ

の学習を深め、差別撤廃と人権社会の実現に向けての議論・意見交換の場となっていました。

第2分科会での様子ですが、「今回3回目の参加だけど、全国の仲間の取り組みを聞き、自分は問題から逃げている部分がある。頑張りたい」とこの集会や問題解決への姿勢に勇気をもらいモチベーションが上がった」など、自らの立場を自覚しつつも思い悩み、苦しみ、涙ながらに思いを語る女子高校生の姿には心を打たれました。また、この集会には被差別部落出身でない高校生の参加も多数あり、「差別をしない子に育って欲しい」という母親の願いから、あえて自宅から遠い解放保育所(※)に通わせていた。自分も今まで人権問題について勉強してきたので、友達の手助けになりたい。この全高の集いも大事な解放運動の一つであるので「広げて行きたい」という発言に、改めて差別をしない、させない、許さない日本社会や地域づくり、そして人権文化の創造という社会変革の必要を強く感じました。

※幼児期より、部落差別や人権問題の解決に向けて取り組み保育所をいう。